

リケジョ今昔物語



兎島千恵

大阪府立大学大学院工学研究科応用化学分野
[599-8570]堺市中区学園町1-2
准教授, 博士 (生命科学).
専門はデンドリマー, バイオマテリアル.
kojima@chem.osakafu-u.ac.jp
www.chem.osakafu-u.ac.jp/ohka/kojima_lab/

今年になって話題沸騰の「リケジョ」。リケジョは理系女子の略であり、2010年に登録された講談社の登録商標である。日本では、理系を選択する女子学生が少なく、結果として女性研究者も少ないので、さまざまなリケジョ増加作戦が繰り広げられている。そこで、筆者の歩みや雑感を通して、読者の皆さん（男性の方にも）に「リケジョ」への理解を深めていただこうという趣旨で筆をとる。

筆者は、両親が共働きだったので、子供のころから自分の仕事をもつのは当たり前だと思っていた。高校のとき、医者になりたいと医学部を目指すも入試で玉砕。C日程（中期日程）で合格した大阪府立大学工学部に進学し、少しでも医療にかかわりたいという希望から、学科、研究室を選んだ（2010年3月号グローイングポリマー参照）。入った研究室はいわゆる9時～9時の生活。それまで月10万円以上稼いでいたアルバイトもきっぱりとやめ、朝から晩までずっと研究室にいる生活を送った。学位取得後、幸いにも助手のポジションに就くことができ、2009年からはテニユア・トラック講師として研究室を主宰する機会にも恵まれた。社会人になってから、徹夜での実験や作業をすることはほとんどなくなったが、研究室漬けの生活はあまり変わらなかった。

2011年に結婚した。結婚ではあまり変わらなかったが、去年の妊娠・出産を機に生活は劇変した。妊娠中、つわりはそれほどひどくはなかったが、疲れやすくなったので、夜遅くまで研究室にいることは少なくなった。10月、産休に入って1週間後に、帝王切開にて娘を出産した。産後はとくに問題なかったが、しばらくは出産前の何気ない作業（車の運転など）も思いのほか大変だった。また、娘は3、4時間周期で「飲む」「泣く」「寝る」の繰り返し。言葉も通じないので心身ともに疲労した。当初、産休中には日ごろできない勉強をしようと思っていたが、メールチェックがせいぜいであった。一方、産休中の研究室。研究はオリジナリティーが高く、やりがいのある仕事である反面、代替要員をつけるのが難しい。筆者の研究室のようなスタッフ一人の研究室

では主宰者が不在になるとたちまち困ってしまう。事前に周りの先生方をお願いして、学生指導や安全確認などの協力を仰ぐことができたので、産休中も研究室を閉鎖せずに何とか研究を進めることができた。産休だけでなく、突然の事故や病気の場合も同様の状況に陥ってしまうと思われるので、スタッフ一人の研究室では、主宰者の健康管理とともに、不測の事態に備えたバックアップ体制の構築は必須であろう。

出産後の仕事復帰に向けた最大の課題は保育園の確保である。幸い、筆者の大学には、国の女性研究者支援事業で保育園ができていたので、産休明けからスムーズに仕事に復帰することができた。仕事復帰し、言葉が通じる人と接する時間が増えて、ほっとしたことを覚えている。しかし、保育園の時間は最大で平日の8時15分から19時まで。もはや9時～9時は不可能となった。リケジョが育児をしながら仕事を続けるためには、パートナーの理解と協力が不可欠である。私の夫は週に数回、娘の保育園の送迎をしてくれている。このように、男性もある程度は自分の仕事を犠牲にしなければならない。このような状況で生産性を維持するためには能率を上げるしかない。代わりがきくかどうか、家でもできるかどうかで仕事を区分し、かつ、優先順位をつけて、効率良く回そうとするが、子供の体調で状況が変わってしまうこともある。今の私の仕事は実験よりもデスクワークのほうが多いので比較的融通しやすいが、実験主体の女性研究者の方は大変ご苦労されていると思う。高分子研究発表会（神戸）の懇親会のお酒の勢いで「女性研究者のロールモデルになる」と豪語したものの（2013年12月号仕事と私事（鈴木登代子先生著）参照）、まだまだ試行錯誤の日々である。

研究を始めて15年。「一方向を向いてがむしゃらに頑張る」という体験は大切だと思う。一方で、最近、娘を連れて歩いていると、道端の草花が目にとまるようになり、見える景色が変わってきたように思う。娘が未来のリケジョになってくれることを願いつつ、リケジョは今日もいく。